日本語とベトナム語の現代敬語体系に関する一考察

石山哲也*
tetsuya1021@hanmail.net

<目次>

1. はじめに
2. 先行研究
3. 日本語とベトナム語の敬語体系
3.1 日本語の敬語体系
3.2 ベトナム語の敬語体系
4. 考察
5. おわりに

主題語: 日本語(Japanese), ベトナム語(Vietnamese), 敬語(honorifics), 文体(style), 漢字文化圏(A sphere of Chinese characters), 文法化(grammaticalization)

1. はじめに

日本語は、敬語体系そのものに関する研究、また実際の対話の場面における敬語の運用に関する研究、さらには敬語史研究といったあらゆる面においてかなり研究が進んでおり、敬語に関して明らかになっている部分の多い言語である。また、韓国語に関しても、史的研究を除いてはほぼ同様のことがいえる。韓国語の場合、14世紀以前の韓国語が実際どのようなものであったか知ることは極めて難しいという条件があり1)、そこについては弱点があるものの、15世紀以降の敬語史については相当部分明らかになっている。そして、日本語と韓国語の現代語の敬語体系の対照研究、また実際の言語行動に関する対照研究は盛んに実施されてきた。

ところが、一方で日本語や韓国語と同じ漢字文化圏に属し、現在は漢字を使用してはいないものの、現在も夥しい数の漢語をとどめており、かつ日本語・韓国語と同様に対者敬語まで兼ね備えているベトナム語は敬語研究の観点から顧られることがほとんどなかっ

* 東國大學校ソウルキャンパス助教授

1) 박양규(1991)も「特に敬語法の場合、その輪郭だけでも全体的な姿を描けるのは後期中世韓国語に限られる」としているほど、その研究は困難である。ここで박양규が「後期中世韓国語」といっているのは15世紀と16世紀の韓国語のことである。

た。無論、後述のとおり、ベトナム語にも対者敬語があるという指摘だけなら、これまでも多くの研究者によってなされてきた。しかし、その指摘は極めて皮相的なもので、ベトナム語の敬語体系が実際にどのようなものであり、日本語のそれとどのように異なるのか述べられる機会はほとんど皆無であったといってよかろう。

そこで本稿は、日本語とベトナム語の敬語体系を対照し、その相違点を述べた上で、それが何に起因するのか考察していきたい。

2. 先行研究

日本語の敬語に関する先行研究は枚挙にいとまがないが、敬語体系を整理した代表的なものとして辻村(1963)、菊地(1997)、文化審議会(2007)を挙げておく。

辻村(1963)は敬語体系全体を素材敬語と対者敬語に分けた上で、素材敬語に上位主体語と下位主体語と美化語の三つを設定、さらに上位主体語と下位主体語に関してはをそれぞれ絶対と関係に分類するという分類を示した。すなわちここでは下位分類を含めると六分類が示されたことになる。ただし、関係上位主体語に関しては、辻村の説が誤っているというわけではないが、関係上位主体語の使用の有無は、必ずしも話題の人物の関係のみによって決定されるものではなく、つまるところ話し手から見た当該動作主への待遇ということになるのであり、それならば絶対上位主体語と別の項目を立てる実益はないものと思われる。

次に菊地(1997)の分類について触れておく。菊地はかつて最も広く知られた尊敬語・謙譲語・丁寧語という三分類を援用した「実用的な分類」と、より学問的に正確たらんとする「学問的な分類」という二つの分類を示している。菊地のいう「実用的な分類」というのは専門家でない読者向けに説いたものであるため、ここでは「学問的な分類」を取り上げることとする。菊地はまず敬語と準敬語との二つを示し、敬語の中に話題の敬語と対話の敬語、そしてその両面を持つものという三つを提示、話題の敬語としては尊敬語と謙譲語Aを挙げた。ここで菊地が謙譲語Aと呼んでいるものは辻村(1963)にいう関係下位主体語である。なお、尊敬語には前述の辻村同様の区別が見られるが、前述のとおり敬語を論ずる際に特に必要な分類であるとは思われない[2)]。対話の敬語としては丁寧語を挙げ、話題と対話の

2) 分類それ自体が理論的には正しくとも、その分類によって何かが明らかになったり、説明がわかりや

両面を併せ持つものとしては謙譲語AB、謙譲語B、謙譲語Bの丁重語用法という三つを挙げている。ここで菊地が謙譲語Bと呼んでいるものは辻村(1963)にいう絶対下位主体語である。謙譲語ABとは関係下位主体語の形式と絶対下位主体語の形式を兼ね備えたもののことである。さらに準敬語として改まり語と美化語の二つを挙げているが、これは本稿の考察対象ではないので割愛する。この準敬語まで含めた場合、菊地は下位分類を一つの項目とするなら八分類していることになる。

最後に取り上げる文化審議会(2007)は尊敬語・謙譲語・丁寧語という従来の三分類を下位分類し、謙譲語を謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱに、丁寧語を丁寧語・美化語にそれぞれ分類し都合五分類となっている。謙譲語のⅠとⅡは菊地(1997)にいうAとBという分類と実質同じものである。

ベトナム語の敬語に関する先行研究としては阮克堪(1974)が最もよく知られたものであろう。阮克堪はベトナム語の敬語を貫く傾向として「上下の秩序の尊重」「自謙自下」「自分と他人の体面を維持する」という三つの傾向を提示して、それぞれの傾向に即した敬語形式を挙げている。しかしながら当該論文以外の業績を見るに、阮克堪は敬語の専門家ではないと思われ、かつ日本語の敬語体系にも精通していなかったものと思われ、ベトナム語の敬語体系について秩序だった整理はなされていない。

日本語とベトナム語の敬語に言及した先行研究としては、まず南(1987)が挙げられる。南(1987:31-32)は敬語体系を持つ言語として日本語、韓国語、ジャワ語、ベトナム語、チベット語、ヒンディー語、ベンガル語の７つを挙げた上で、その類型についてもネウストプニー(1974)を参考にしつつ、日本語と韓国語の敬語が類型的に最も類似している旨述べている。類型に関して述べた部分ではベトナム語への言及はない。金田一(1988:183)は日本語、韓国語、ベトナム語、タイ語、ビルマ語、ジャワ語、ポナペ語、サモア語の８つを挙げた上で、広義の敬語も含むならヨーロッパの言語も敬語を持つとしている。佐藤(2002:133)は敬語のある言語として韓国語・チベット語・ジャワ語・中国語・ベトナム語・ヒンディー語を挙げている。ただし、これらの先行研究はベトナム語について日本語同様に敬語体系を持つと述べたに過ぎず、その敬語体系が日本語のそれと比べてどのような共通点、あるいは相違点を持つのかについて述べたものではなかった。

これらの先行研究よりやや詳細な情報を提供するものとしては宮地(1981)が挙げられる。宮地(1981:23)は、史的対照敬語史研究の可能性について言及した箇所で韓国語、ジャ

すくなったりするものでない以上、特に行う必要はないものと思われる。特に本稿で筆者が述べんとすることと、上位主体語の絶対・関係の別は無関係なので、この区別は無視することとする。

ワ語、スンダ語、タイ語との対照敬語史研究が近代以降に限ってならできるのではないかと述べている。また、宮地(1981)はいくつかの言語についてさらに詳しく敬語体系のうちのどの部分を充足するのかについて次の<表１>のようにまとめている。

<表１> 宮地(1981)に示された世界の敬語体系[3)]

	日本	韓国	ジャワ	ベトナム	チベット	モンゴル	スンダ	ヒンディ	チェコ	中・英等
尊敬語	○	○	○	○	○	○	○	○	△	(△)
謙譲語	○	○	○	○	○	○	○	(○)	×	×
丁寧語	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×

宮地は日本語教育学会編(1982:228)において、これと類似した表を提示しているが、そこにはスンダ語がなく、ヒンディ語の謙譲語は△になり、右端の枠からは「中国語」という言葉がなくなっている。日本語教育学会編(1982)のほうが後出であるから、あるいはそれが宮地の修正後の立場なのかもしれないが、大同小異であるため詳細な検討は割愛する。

宮地はさらに「尊敬語の発達している言語はおおいが、丁寧語の発達している言語はおおくない。日本語の敬語のうちでの丁寧語の発達がおくれることと対応することであろうということがわかる」と述べ、敬語体系において対者敬語がより後発的、かつ有標的体系として存在していることに言及した。

また、本稿の主要な考察対象となる対者敬語について説明するには「文法化[4)]」と呼ばれる現象が極めて有用である。金水(2004)は文法化を「自立的な品詞・形態を持つ語が付属的な品詞・形態を持つ語へと変化していく統語論的・形態論的側面と、語の具体的な意味が抽象的な意味へと変化していく意味論・語用論的な側面がある」とした上で、特に意味論・語用論的側面に着目し、「はべり」「候」「ござる」等が文法化を経て対者敬語になっていった過程を跡付けた意義深い研究を発表している。多くの言語において、対者敬語の発生には文法化が関与しているものと思われ、後述のようにベトナム語においても一部それが見られる。

3) 宮地(1981)は「朝鮮語」という語を用いているが、本稿の他の部分の記述と統一するため「韓国」とした。
4) 亀井ほか編(1996)は文法化を「自立的、語彙的な形式が一定の文法的機能を担う形態素、すなわち『文法形式(grammatical form)に変わるような言語変化のこと」としている。

3. 日本語とベトナム語の敬語体系

3.1 日本語の敬語体系

日本語の敬語体系は論者によって様々に説かれるが、筆者は先行研究において言及したように辻村(1963)、菊地(1997)、文化審議会(2007)それぞれの長所を取り入れ、純然たる敬語としては素材敬語(尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱ)と対者敬語(丁寧語)を設定することとする。基本的には、辻村(1963)や菊地(1997)の分類は優れているが、本稿の目的に照らした場合複雑に過ぎるため、文化審議会(2007)の分類を援用している。ただし、美化語は菊地(1997)にも述べられているとおり、敬語に準ずる存在[5]であるため、本稿で述べる敬語体系には含めない。以下に本稿で述べる日本語の純然たる敬語の体系とその例を示しておく。

＜表２＞ 日本語の敬語体系(準敬語を除く)

名称	例
尊敬語	「いらっしゃる」等の尊敬語動詞(補助動詞としての用法も含む)、「お / ご~になる」、「お / ご~なさる」、「~(ら)れる」、「お / ご+動詞の名詞形(高めるべき人物の動作・所有等に関わるもの)」、「お / ご+形容詞」、「お / ご+名詞」
謙譲語Ⅰ	「申し上げる」等の謙譲語Ⅰ動詞、「お / ご~する」、「お / ご+動詞の名詞形(高めるべき相手に向かうもの)」、「お+名詞(高めるべき相手に向かうもの)」
謙譲語Ⅱ	「参る」等の謙譲語Ⅱ動詞、「拙著」等の謙った表現
丁寧語	です、ます、(で)ございます、っす

日本語の敬語体系については今更こと新しく述べるまでもなかろうが、文化審議会(2007)で取り上げられていない項目に関してのみ簡単な説明を加えておく。

まず、尊敬語の「お / ご~なさる」であるが、これは明治時代までは尊敬語の主流であったものの、「お / ご~になる」に取って代わられる形となり、今では使用頻度が下がってしまったが、それでも特に漢語の場合は以下の例文1)、2)のように、頻繁に見聞きするものであ

5)「敬語に準ずる存在」というのは、美化語の使用は然るべき聞き手がいる場合や然るべき場面においてより旺盛になることは明らかであるが、一方で聞き手にも場面にも全く配慮しなくてもよい場合の使用も主に女性において広く認められる。したがって、美化語は敬語と無関係ではないが、純然たる敬語とまではいえないという意味である。無論、文化審議会(2007)も決してこの事実を看過しているわけではなく、美化語は他の四項目とは性質の異なるものであると述べている。

るため、例に含めた。

1) リース料の収入について、毎年元利均等でリース料を払っていくというふうにご説明なさっていると思うんですけれども、(以下省略)　(第159回国会会議録)

2) 最近の状況というのを見てみますと、委員も御指摘なさいましたように、経済はまさにグローバリゼーションということで、(以下省略)　(第139回国会会議録)

謙譲語に関しては特に追加して述べるべきことはない。非専門家の間では謙譲語を二つに分けたことがやや新奇に映った可能性もあるが、行為の受け手が高めるべき人物であるか否かが使用の有無を決定する謙譲語Ⅰと、謙りや改まりを示す謙譲語Ⅱが別物であることは、既に100年以上前に三矢(1908)が論じていることであり、辻村(1963)をはじめとした多くの研究がその区別を受け継いできたことから、研究者の間では自明のことであった。この区別の必要性については既に多くの文献が述べているので、ここでは繰り返さない。

丁寧語に関しては文化審議会(2007)が取り上げていないものとして、本稿では「っす」を加えている。この形態は「です」の「で」部分が縮約されて促音化(出現環境によっては撥音化・脱落する場合もある)したものである。菊地(1997:361)は「まことに最低限の敬語という趣であり、付けないより辛うじてましなだ妙であって、然るべき相手に使う言葉ではない」と述べている。また同じページにはコーチに「大丈夫か」と問われ、「大丈夫っす」と答えてペナルティを課されたプロ野球選手の記事が紹介されている(記事は1992年のもの)。しかし、その一方でこの形態が名詞・形容詞・動詞のどれにも下接し得るという利便性および、言語の経済性への貢献という面が研究者の間でも注目されている。例えば尾崎(2003:148)は、「です」「ます」2系列から「す」1系列へと丁寧語の体系が単純化している点は、文法現象としても注目される」と述べている。

以上、日本語の敬語体系を簡単に見たが、これらを素材敬語と対者敬語とに分けた場合、尊敬語と謙譲語Ⅰは素材敬語、丁寧語は対者敬語、謙譲語Ⅱはどちらの要素も持っているということになる。どちらの要素も持っているとはどういうことかというと、謙譲語Ⅱの場合、その使用の有無を決定づけるのは、聞き手が誰であるのか、あるいはどのような場面で話しているのかという素材と無関係な部分ではあるものの、その表現自体は素材に関わるものであり、表現される話題の人物が誰であるのかということから完全に遊離している丁寧語とはやはり区別されるべきなのである。

3.2 ベトナム語の敬語体系

ベトナム語はオーストロアジア語族に属する言語で類型的には孤立語的性質の強い言語である。ブルトン(1988:119)は「モン・クメール諸語およびオーストロネシア諸語の基層をシナ・チベット諸語の上層が覆った」混成語であると述べており、冨田(1987:42)は「ベトナム語は、オーストロアジア語族の「ベト・ムオン語派」と言うところに分類されている。(中略)その根拠は、基礎語彙と言われる身体名称の一部や基本数詞に一定の音韻対応が見られ、また、ベトナム語の中に、モン・クメール語の特徴である、接辞法による語彙派生の痕跡を止めるものが存在していることなどによっている」と述べた上で、「結局のところ、ベトナム語は、オーストロアジア的言語集団を基層とし、それに、シナ・チベット語やオーストロネシア語的要素が混入して出来た複雑な言語であると言うのが真相であろう」としている。

ベトナム語には6種類の声調があるが、これは大野(1993:11)によると語末や語頭の接辞を喪失した代償として発達したものであるとの解釈が支配的である。アンリ・マスペロは、この声調によりベトナム語をシナ・チベット語族に帰属するものと見たが、近年ではこのような見方をする専門家はいない。

ベトナム語と日本語の共通点をいくつか挙げておくと、漢語語彙が全語彙の半数以上を占めること、数の概念が文法カテゴリーとして存在していないこと、類別詞の発達が見られること、そして対者敬語を含む敬語体系を持つことが挙げられる。なお、この共通点は韓国語にも全て該当するが、この特徴を全て満たすのは世界の言語の中でも日本語・韓国語・ベトナム語の三つのみである。

前述のとおり、ベトナム語も敬語体系を持つ言語であるが、単に敬語体系を持つのみならず、尊敬語、謙譲語、丁寧語を兼ね備えた世界的にも珍しい言語の一つである。筆者の知る限り、対者敬語を持つ言語は前述の宮地(1981)に挙げられた五言語以外にはビルマ語とタイ語しかないため、これは非常に大きな特徴である。しかし、ベトナム語の敬語は日本語のそれとは性質の強く異なるものである。

まず、そこに言及する前にベトナム語の敬語体系を以下に示す。

<表３> ベトナム語の敬語体系

名称	例
尊敬語	「尊」等の漢語接頭辞、「ông」等の代名詞
謙譲語	「賤」等の漢語接頭辞、「con」等の代名詞
丁寧語	「ạ」、「xin」、「dạ」等

まず、一目でわかる特徴として、ベトナム語の敬語は日本語や韓国語と異なり、用言でなく世界の多くの言語同様、主に名詞に関して表現されるところである。

また、上の<表３>の「謙譲語」とは日本語でいうなら「謙譲語Ⅱ」に該当するものであり、「謙譲語Ⅰ」にあたるものはベトナム語には存在しない。

この表を見ても明らかなように、ベトナム語の敬語は全面的に中国語の影響を受けている。無論、固有語による敬語も代名詞等には見られるが、その他は尊敬語を構成する接頭辞「尊・貴・令・聖・竜・玉」、謙譲語を構成する接頭辞「賤・敝」等を用いていることからも中国語の絶大な影響が窺える。ベトナムは紀元前207年から西暦939年までの1000年以上にわたり中国の支配を受けていたためそれも無理からぬことではある。ベトナム語同様、中国語の強い影響を受けた日本語においてもこれらの接頭辞の使用が認められる。阮克堪(1974:136)はベトナム語が中国語由来でない代名詞敬語を持つことからベトナム語の敬語がベトナムの独創性を明瞭に反映していると述べるが、その主張はベトナム語の代名詞体系が中国語的思考とは無関係である、すなわち中国語の流入以前にすでにベトナム語において代名詞体系が成立していたこと証明してこそ可能である。無論これは現存する資料をもってできることではないのであるが、単に代名詞を借用しなかった事実をもってベトナム語敬語が独創的であると見るのは無理がある。現に阮克堪(1974:122)においては、ベトナム語敬語の発想が孔孟の倫理にあることが述べられてもいるのである。

また、ベトナム語にも「親族名称の虚構的用法」が認められる[6]。親族名称の虚構的用法とは、鈴木(1973)によれば「実際には血縁関係のない他人に対し、親族名称を使って呼びかけること」をいうもので、程度の差こそあれ、どの言語にも見られるものであるという。これが特に盛んに用いられているのは日本語・韓国語・タイ語等である[7]。ベトナム語にお

6) 三根谷(1955:854)に親族名称が代名詞として使われることが述べられている。この代名詞も中国語の影響を強く受けたもので、これらの代名詞には漢語のものが多く見られる。

7) ただし、日本語においては親族名称の虚構的用法は衰退傾向にあり、「おじいちゃん・おばあちゃん・おとうさん・おかあさん」は使われるが、兄弟姉妹に関するものは徒弟制度を維持しているような集団において使われるのが普通である。今、日本で最も兄弟姉妹の虚構的用法を体現しているのは吉元

ける親族名称の虚構的用法でおもしろいのは、同年代の男性には「兄」を意味する「anh」を用い、同年代の女性には「姉」を意味する「chị」を用いることである。これは阮克堪(1974)がベトナム語の敬語について述べた「自謙自下」の傾向と無縁ではなかろう。年長の男性には「翁」由来の「ông」を用い、年長の女性には「婆」由来の「bà」を用いる。一人称に関しても通常は「tôi」を用いるが、目上に対しては「子」を意味する「con」を用いることなどからもわかるように、ベトナム語の敬語には疑似家族的要素が強く反映されている。

次に、ベトナム語の対者敬語(丁寧語)について述べていきたい。ベトナム語の対者敬語は複数ある。まずは「ạ」という文末語気詞であるが、これはチュー・ノム8)で「啊」と表記することからもわかるように、中国語の文末語気詞由来のものであると思われる。富田(1987:50)は、ベトナム語の借用語が「名詞や動詞、形容詞、副詞に限らず、いわゆる「虚辞」と言われる文法語彙にまで及んでいる」旨指摘している。富田は具体例を挙げていないが、この「ạ」もその中の一つであろう。それでは、この「啊」はもともと中国語では何であったのかというと、一部に敬語的な意味があるとの主張もある9)が、それは通説といえるほどではなく、通説における解釈は現代に日本語における終助詞のようなものである。とはいえ、それがベトナム語において丁寧語として使われているということは、かつては中国語でもそのように使われていた時期があったということは充分可能性のあることではある。

次に「xin」を挙げておく。「xin」の意味は小野地(1980)によると「①願う。②要請する。③謹んで。④乞食をする。」である。このうち対者敬語として使われているのは③の「謹んで」という意味である。チュノム表記は「口偏に千」であるが、元は中国語の「請」であったのではないかと疑いたくなる。事実、笹原(2011)は学生時代にベトナム語の「xin」は「請」であると習ったと述べている。しかし、『越南字典』や『四書不二字音義撮要』に依拠してベトナム漢字音を整理した三根谷(1993:493)では「請」のベトナム漢字音は「thinh」となっているため、「xin」が「請」に由来するとの仮説は、別の有力な根拠が示されない限り主張することができない10)。チュノム表記をした時点で「請」ではなく「口偏に千」と表記が作られたということ

興業所属のタレントである。

8) 主に形声の原理を用いて漢字を加工し、ベトナム語を表記するために使われた文字のことで、万葉仮名が表音的な性格を持っていたのに対し、チュー・ノムは表語的性格が強い。亀井ほか(1996)によると、その発生は１世紀とも伝えられるが、その隆盛期は11~13世紀であり、18~19世紀は爛熟期といわれる。現在のアルファベット表記は17世紀から見られるが、広く行われるようになったのは19世紀に入ってからである。

9) 南(1987)は、文末に「啊・吧・呢」をつけて言葉を丁寧にできるという蘇徳昌の主張を紹介しているが、これは通説といえる状態ではなく、筆者が複数の中国語話者インフォーマントに確認したところ、これを丁寧語と認めた者は皆無であった。

10) 現在ベトナムで行われているアルファベット表記では、三等韻の場合喉内鼻音韻尾が「-nh」と表記され

は少なくともその時点でベトナム人が「請」と「xin」を同じものと解していなかったことを意味するので、この二つが同根であると主張するのは無理がある。

さて、その「xin」であるが、これはもともとは「請う」という意味であったが文法化が起こり、許しを請うような表現から、ついには単に言葉を丁寧にするだけのものへと意味が拡張していった。次の例3)、4)のようなものがその例である。

3) Xin tạm biệt.
4) Xin cảm ơn anh.

3)は「xin」がない場合は「さようなら」という挨拶であるが、「xin」がつくことによって丁寧な表現になっている。4)についても「cảm　ơn」だけなら「ありがとう」という程度の意味であるが(「ありがとうございます」と訳す場合もあり)、「xin」がつくことによってさらに丁寧な表現になっているのである。この例を見ても明らかなように、もはや「xin」には「請う」という意味は全くない。

実は、日本語にもこれと関連した表現があり、蒲谷ほか(1998)では「あたかも表現」として取り上げられている。また石山(2007)も日本語と韓国語を対照しつつ、日本語の授受表現に虚構的用法が見られる点を指摘している。井上(1999:160)にも「~せていただく」と関連してこうした内容が指摘されているが、今や完全に自己完結的な行為についてすら「~せていただく」が使われるケースも珍しくなくなった。例5)はある声優のインタビューで実際に使われた表現である。

5) 初の主役をさせていただいているので、すごく緊張しているところもあるんですが、一生懸命頑張らせていただいております。

例5)には「~せていただく」が二回出てくる。最初の例は作品の制作者にキャスティングされての主役ということで、「~せていただく」の使用は特に奇異ではないが、二度目の例は「頑張る」という完全に自己完結的な内容に「~せていただく」が使われた新しい用法である。これを誤用と退けるのは容易であるが、これまで「~せていただく」が歩んできた道程を見ると、今後勢力を持ってくる可能性は充分ある。

最後に「dạ」を挙げておく。これは阮(1974:129)に「Dạ, tôi đi」で「thì tôi xin đi」のような意味

るのが普通である。

になるとの言及がある。すなわち、これも言葉を丁寧にするものであるが、元来の意味は肯定の返答や、相手の言葉が聞き取れなかった時に聞き返す言葉等として使われるものである。肯定の返答が対者敬語へと変化していった例はタイ語にも見られる。

ただし、これらのいずれの対者敬語も目上や親しくない相手と話すときに必ず文中に現れなければならないものではない。たとえば文末語気詞の「ạ」は、当然先輩と話す時よりも上司と話す時のほうが使用頻度が上がるが、たとえば日本語の対者敬語のように、完全な文にはほぼ常につけるというものではないのである。ベトナム語のその他の対者敬語も同様である。

以上、ベトナム語の敬語体系を概観したが、日本語と最も著しく異なる点は、ベトナム語にも対者敬語があるにはあるが、必須ではないところである。すなわち、日本語や韓国語のように文体的対立を示していないのである。いくら目上と話しているとはいえ、ベトナム語で話す時に全ての文に「ạ」や「xin」をつけて話すということはないのである。その代わり、親族名称を使った代名詞の使用頻度は非常に高く、自分自身のことを述べるのではなく、相手に関することを述べるのであれば、「ông」「bà」「anh」「chị」のうちのどれかが使われるのが普通である。しかし、これも日本語においては相手を代名詞で指すことがそれほど礼儀正しい言語使用とは認識されていないため、この点においても異なる。

また、ベトナム語は敬語が名詞の前につける接頭辞と代名詞に集中していることから、特定の動作が高めるべき人のものであったり、また高めるべき人に向けられたものであることを表す手段を持たない。前述の対者敬語をつけて表すことにより、それに近い意味を表すことはできるのであるが、それ専用の形式は持っていないのである。

4. 考察

敬語の誕生はタブーによるとの金田一説は非常に強く支持されているが、西田(2003)のように、それに対して批判的な立場もある。また、金田一も自身の説に修正を加えるかの如く、後に美称起源との複合的なものが敬語の起源と述べるに至っている。また、大野(1966:74)には「だいたい日本人の尊敬の意識は、自然に対する恐怖、畏怖にはじまり、神や天皇に対する畏敬に移り、人聞に対する尊敬の念に発展したのであり、さらに進めば、尊敬から親愛へ、そして軽侮へと進むのが基本的な道すじである」と述べている。さらに大野

(1999)では日本の固有語には人に上下をつけるようなものがないことから、人の上下関係を言葉で表すのは中国的習慣である旨指摘している。

井手(2006:58)もこれに似た指摘をしている。いわく、「相手のことを立てて尊敬語で話し、話し手である自分のことは下げて謙譲語でというのは、東洋の世界観と無関係ではなさそうである。世界観とはB.C. 10世紀頃中国で書かれた『易経』に示され、以後時代を越えて東洋文化の底流として存在していると考えられる陰陽の考えである。この陰陽思想に従えば、相手が陽、自分が陰に立つことになる。敬語の使い方の底流には中国文化の影響を古くから受けている日本の社会でだれもが分け持っている常識的認知習慣があると思われる」とのことである。これはこのことは中国語は勿論、その影響を非常に強く受けた日本語・韓国語・ベトナム語において確認できることである。三輪(2000:144)は中国語に敬語が乏しいことを指摘しつつ、これらの中国語由来説に疑問を投げかけるが、ベトナム語の敬語等から見ても中国語が言語の異なる周辺地域の敬語形成に大きな役割を果たしたことは十分に首肯できる。また、三輪は中国語を指して「敬語意識のほとんどない言語」としているが、それは現代中国語に関していえることであって、彭国躍(1999)を見ても明らかなように、かつての中国語は大変煩雑な敬語を用いたのである。

さて、問題の日本語とベトナム語の敬語体系であるが、両者の共通点は尊敬語・謙譲語のみならず対者敬語をも兼ね備えていることであった。かつ、対者敬語に関しては日本語はほぼ全面的に、ベトナム語も一部文法化によって、対者敬語を持つに至ったという共通点も持っている。

日本語の対者敬語は「侍り[11]」に始まり、「候[12]」「ござる」「おじゃる」「おりゃる」等[13]、およそ全ての形式が文法化によって産み出されたものであった。また、現代の対者敬語として残っている「です」は、「で候」の転とも「でございます」の転ともいわれるが、いずれにしても文法化によって産み出された形態がさらに変化したものであることに変わりはない。

---

11) 森野(1971:152)も「貴人の足下に、その支配下に隷属するものとして、おそれかしこまって伺候する意味の謙譲語であったといわれる」としているように「はべり」は当初、下位主体語として使われたものであった。ところが平安時代に入り「はべり」の使用の場面依存度が高まり、自身のことを述べること以外にも使われた後、最終的には尊敬語にまで下接するようになる。これを森野は「場面相関度の増大とともに、伺候という、特定の、実質的な、存在の属性表示という意味が希薄化し、それに随伴して、纏綿する非支配的隷属的謹粛感が遊離、抽出され、話し手の、聞き手に対する謹粛的応接態度の直接的な表現として、本来、待遇的把握の直接対象にはなりにくい素材を話題化して行なわれる叙述にも用いられるようになった」としている。ここで森野が述べていることは、まさに「はべり」の文法化に他ならない。

12) 西田(2003:227)は「候」の元の意味を「貴人の方を見てその命令を待っているさまである」としている。

13) 「ござる」「おじゃる」「おりゃる」の文法化過程については金水(2005)参照。

「ます」は「参らする」の文法化である。

これに対し、ベトナム語の対者敬語は「請う」という意味であった「xin」が文法化したもの、肯定の返答であった「dạ」の文法化したもの、そして中国語の文末語気詞由来と思われる「ạ」がある。三つのうち二つが文法化によって生じたのは日本語と同様であるが、「ạ」に関しては中国語の文末語気詞をそのまま受け継いだものと思われる。

しかし、同じように中国語の多大なる影響を受けた日本語とベトナム語がこのように異なる敬語体系を示すのはどういうことであろうか。まず、言語そのものの構造とその言語を表記する手段という二点が挙げられる。言語そのものの構造とはすなわち日本語が膠着語で、ベトナム語が孤立語であるということである。膠着語である日本語は後ろに様々な機能語がついて複雑な意味を表すことが可能になっているが、ベトナム語の場合はそのような構造ではないため、文法化そのものが膠着語ほどには起こりやすくなく[14]、起こったとしても日本語のように音韻や形態の境界を喪失するようなことにはなりにくい。それは二点目に挙げた言語を表記する手段にも関係するのであるが、日本語が表音文字である仮名による表記の歴史を約千年持つのに対し、ベトナム語は長きにわたって漢文もしくはチュー・ノム表記を使用しており、チュー・ノム表記はその表語的性格から形態素間の境界の消失を容易に許さなかったと考えられる。

もう一つ、指摘しておくべきことは、大野(1966)にもあるような自然や神に対する畏怖の念から出た表現が日本語の敬語を豊かにしている点である。日本人のこうした意識は、中国語の影響とはおそらく無関係に、「おのずからそのようになる」という形式が敬意を表すものとして文法化していく道を歩ませた。現代語の「~(ら)れる」の前身である「~(ら)る」も、最も古くは自発の「ゆ」であろうと考えられているし、「おっしゃる」「いらっしゃる」等にもそうした感覚が窺える。

以上のような違いが、非常に似た条件下で発達してきた両国の敬語体系に大きな差を与えたのであろう。

---

14) 孤立語においても文法化が起こることは無論ある。亀井ほか編(1996)には「了」「着」「過」という自立語がテンス・アスペクトを表す機能語となった中国語の文法化の例が紹介されている。しかし、これらの例を見ても中国語の表記が表語的であることから形態素の境界が消失するには至っていない。

5. おわりに

以上、日本語とベトナム語の敬語体系を概観し、その共通点と相違点について見てきた。敬語を素材敬語と対者敬語に分け、素材敬語をさらに尊敬語と謙譲語に分けるという簡易分類では、日本語もベトナム語もその全てを持っているということになるが、謙譲語をⅠとⅡに分けた場合、ベトナム語は謙譲語Ⅰを欠いているということがわかる。また、尊敬語と謙譲語Ⅱにしても、日本語が主に動詞において著しい発達を示しているのに対し、ベトナム語は接頭辞および代名詞において発達を示していることを見た。対者敬語に関しては、日本語が自立語の文法化によって生じ、形態素としての境界を消失するまでに意味・音韻の両面で完全に文法化したのに対し、ベトナム語では文法化は認められるものの、形態素間の境界消失には至っておらず、さらに中国語の文末語気詞をそのまま借用した例も見られることを指摘した。また、ベトナム語の対者敬語は然るべき相手との対話の中でも必須ではない、すなわち対者敬語が文体的対立を持っていないことも重要な相違点である。

この差異を生ぜしめた要素としては、言語類型およびその表記法の差異と人々の意識の差異という二点が挙げられる。孤立語であるベトナム語には、膠着語である日本語に比べて文法化が起こりにくく、さらに万葉仮名と一見類似しているかに見えるチュー・ノムはあくまで表語的な表記法であり、形態素間の境界を曖昧にすることを許容しなかった。かつ、日本語敬語を貫く流れとして認められる「おのずからそのようになる」という語法による敬語の構築がベトナム語には現れることがなかったのである。

【参考文献】

石山哲也(2007)「日本語の韓国語の授受表現使用領域に関する一考察―恩恵の授与を表さない補助動詞用法を中心に―」『日本語學研究』第20輯、韓國日本語學會、pp.51-65
井手祥子(2005)『わきまえの語用論』大修館書店、pp.57-62
井上史雄(1999)『敬語はこわくない』講談社、pp.160-178
_____(2011)『経済言語学論考―言語・方言・敬語の値打ち―』明治書院、pp.266-363
大江孝男(1981)「アルタイ諸語」『講座言語 第6巻 世界の言語』大修館書店、pp.113-148
大野晋(1966)『日本語の年輪』新潮社、pp.65-90
_____(1999)『日本語練習帳』岩波書店、pp.151-154
大野徹(1987)「東南アジア大陸の言語とその系統」『東南アジア大陸の言語』大学書林、pp.1-33
尾崎善光(2003)「敬語調査から何が引き出せて、何が引き出せないか」『朝倉日本語講座８敬語』朝倉書店、pp.139-158
影山太郎(1987)「語彙の比較とプロトタイプ」『日本語学』第６巻第10号、明治書院、pp.4-12

蒲谷宏・川口義一・坂本恵(1998)『敬語表現』大修館書店、pp.124-131
亀井孝・河野六郎・千野栄一編(1996)『言語学大辞典 術語編』三省堂
川崎晶子(1992)「日本の敬語と世界の敬語」『日本語学』第11巻第３号、明治書院、pp.42-48
菊地康人(1997)『敬語』講談社
_____(1981)「世界の言語」『講座言語 第6巻 世界の言語』大修館書店、pp.3-24
金東俊(1988)「朝鮮語の敬語」『日本語百科大事典』大修館書店、pp.653-659
金水敏(2004)「日本語の敬語の歴史と文法化」『言語』33-4、大修館書店、pp.34-41
_____(2005)「日本語の文法化と意味変化」『日本語の研究』第1巻3号、pp.18-31
金田一京助(1959)『日本の敬語』角川書店
金田一春彦(1988)『日本語　新版(下)』岩波書店、pp.183-196
阮克堪/竹内与之助訳(1974)「ベトナム語の敬語」『敬語講座8 世界の敬語』明治書院、pp.121-138
輿水優(1988)「中国語の敬語」『日本語百科大事典』大修館書店、pp.651-653
坂本恭章(1981)「オーストロ・アジア諸語」『講座言語 第6巻 世界の言語』大修館書店、pp.171-196
笹原宏之(2011)「漢字の現在　第93回　ハノイの大学(ダイホック)で」Sanseido Word-Wise Web 内記事
(URL:http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/2011/04/26)
佐藤美智代(2002)『日本語の源流』青春出版社、pp.132-137
杉田洋(1981)「オーストロネシア諸語」」『講座言語 第6巻 世界の言語』大修館書店、pp.197-230
鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波書店、pp.158-178
辻村俊樹(1963)「敬語の分類について」『国文学言語と文芸』五巻二号、おうふう(北原保雄編(1978『論集日本語研究９ 敬語』有精堂出版、pp.81-87に再録)
富田健次(1987)「ベトナムの言語」『東南アジア大陸の言語』大学書林、pp.34-86
_____(1988)「ヴェトナム語」『言語学大辞典　世界言語編(上)』三省堂、pp.759-787
_____(1993)「ベトナム語」『世界のことば小事典』、pp.398-401
西田直敏(2003)「敬語史と現代敬語」『朝倉日本語講座８ 敬語』朝倉書店、pp.225-251
日本語教育学会(1982)『日本語教育事典』大修館書店、p.228
ネウストプニー、J. V.(1974)「世界の敬語」『敬語講座8 世界の敬語』明治書院、pp.7-40
橋本万太郎(1981)「シナ・チベット語族」『講座言語 第6巻 世界の言語』大修館書店、pp.149-170
ブルトン、ロラン/田辺裕・中俣均共訳(1988)『言語の地理学』白水社、p.119
彭国躍(1999)「中国語に敬語が少ないのはなぜ？」『言語』338、大修館書店、pp.60-63
町田健(2008)『言語世界地図』新潮社、pp.113-116
三矢重松(1908)『高等日本文法』明治書院(北原保雄編(1978『論集日本語研究９敬語』有精堂出, pp.81-87に再録)
南不二男(1987)『敬語』岩波書店、pp.1-58
三根谷徹(1955)「安南語」『世界言語概説 下巻』研究社、pp.833-870
_____(1993)『中古漢語と越南漢字音』汲古書院
宮地裕(1981)「敬語史論」『講座日本語学9 敬語史』明治書院、pp.1-25
三輪正(2000)『人称詞と敬語―言語倫理学的考察―』人文書院、p.144
森野宗明(1971)「古代の敬語 Ⅱ」『講座国語史５ 敬語史』大修館書店、pp.97-182

논문투고일 : 2014년 09월 10일
심사개시일 : 2014년 09월 20일
1차 수정일 : 2114년 10월 08일
2차 수정일 : 2014년 10월 14일
게재확정일 : 2014년 10월 19일

〈要旨〉

日本語とベトナム語の現代敬語体系に関する一考察

本稿は日本語とベトナム語の敬語体系を概観し、その共通点と相違点について指摘した後にその要因を考察したものである。

日本語は尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱ・丁寧語という体系を持つのに対し、ベトナム語は日本語でいうところの謙譲語Ⅰを欠いており、尊敬語・謙譲語Ⅱにしても日本語が主に動詞において著しい発達を示すのに対し、ベトナム語では接頭辞と代名詞において発達していることを見た。丁寧語に関してはベトナム語は日本語が持つような文体的対立を持っておらず、完全な文であれば常に登場するというものではないことを見た。その中身に関しては、日本語の丁寧語が高度に文法化されたものであるのに対し、ベトナム語では文法化は見られるものの、形態素の境界がはっきりと示されており、意味のみが概念語から機能語へとシフトしていることが観察された。

この相違点を生ぜしめた要因として、筆者は言語類型の相違およびその表記法の相違、そして自然や神への畏怖の念から生じた「おのずからそのようになる」という表現が日本語において豊富な敬語を産み出したことを指摘した。

A study on the honorific systems of Japanese and Vietnamese

This article is on the honorific systems of Japanese and Vietnamese. The following facts were clarified in this study.

The honorific system of Japanese contains exalted forms, two types of humble forms, and polite forms, whereas that of Vietnamese contains exalted forms, one type of humble forms, and polite forms. The honorific system of Japanese was developed on verbs, while that of Vietnamese was on prefixes and proverbs.

As to polite forms, while Japanese ones were totally grammaticalized, Vietnamese ones keep their morph because of the characteristic as an isolating language. The writing by chữ nôm also took part of this phenomenon. And Vietnamese does not have exalted forms made by feeling of awe against the nature and God.